



# くすのき



学校のシンボル  
くすの木

## 環境問題について考えた夏

校長 菊地 勇

38日間の夏休みが終わり、日焼けした顔や体に、瞳を輝かせた子どもたちの笑顔と元気な声が学校に戻ってきました。暑さのピークはいつなのだろうか？お盆を過ぎても、猛暑日が続く、年間日数の記録を更新しているとか。学校のウサギは、この猛暑への対策として、1学期末から校舎内に移動して過ごしています。異常気象という言葉も聞きなれてしまい、これが「スタンダード」と思っていく必要があると考えています。

私は、夏休み中、市内の小中学校の教員約50人と一緒に理科の臨地研修会に参加してきました。今年の研修場所は、東京都立川市にある「極地研究所」と「南極・北極科学館」でした。専門家から最新情報を教えていただいたり、南極の氷を使った実験や観察も行ったり、授業プランを考え交流しました。南極・北極科学館は、入館できますので行ってみるのもいいかもしれません。「南極の氷」があって触れますよ。南極では、降った雪が押し固められてゆっくりと氷に変化していきます。空気を含んだ雪が氷になるため、溶けるときには「気泡」がはじけて「ぱちぱち」と音がします。実際に実験の時に聞いてみました。結構はっきりと聞き取れますよ。この気泡には太古の空気が閉じ込められたものなので、音と太古の空気…想像すると「ロマン」だなあと感じます。

極地の研究というと、地球温暖化や海洋酸性化などの環境問題や気象の研究などが挙げられます。地球の内部構造は、ゆで卵になぞられることがあります。地殻が「卵殻」、マントルが「白身」、中心部の核が「黄身」。または、リンゴにも例えられます。地球を「リンゴ」だとすると、「大気」の厚さは地球の直径の1/100ほどにしか過ぎないので、「リンゴの皮」。この「リンゴの皮」ほどの「大気圏」で起きるのが「気象」なんですよね。もっと細かく見ていくと、雲や雨、雪などの気象現象の大部分は、大気圏の一番下の地表に近い10kmそこそこの「対流圏」でおきています。環境問題や気象について考えるとき、地球規模で考えると、皮のような薄い場所でおきていますが、人間に与える影響は大きいです。各地の大洪水や山火事、ヒマラヤ山脈や極地の「氷」の融解など。今年の夏は、日本各地で洪水による被害があったり、ハワイやカナダの山火事による被害があったりと、被害にあわれた方へ心よりお見舞い申し上げます。異常気象による災害には人の命がかかっているのが当然注目を集めますが、目に見えにくい地球温暖化を抑えることにはそこまで敏感ではないように感じます。目に見えないのかもしれませんが、私自身、問題意識を持ち続けていきたいなど、いろいろ考えさせられた研修となりました。

長い夏休み、子どもたちはどんな経験や体験をしたのでしょうか？どんな「〇〇の夏」でしたか？また、夏休み号でも触れましたが、どんな家庭での「役割」を頑張りましたか？よかったら、校長先生に教えてください。私は、少しですが「環境問題について考えた夏」だったかもしれません。

2学期のスタートは、1学期の良かったことや反省を生かして、新たなスタートが切れるチャンスです。目標やめあてを定めて、頑張りましょう。

学年費、教材費等の口座振替手続きのご協力ありがとうございました。2学期より、学年費、教材費等の口座振替がスタートします。各学年だより8・9月号で集金内容、集金日、集金額をお伝えいたします。学校HPにアクセスしていただき、学年だよりを確認し、期日に引き落としができるよう、ご準備ください。